自己実現のひとつの姿

——ジェーン・エアの生き方をめぐって——

加 茂 映 子

A Study of *Jane Eyre*

——A Way of Self-realization——

Eiko KAMO

Abstract: *Jane Eyre* (1847) is a novel by Charlotte Brontë, in which the heroine, Jane Eyre, reviews her life from the age of ten to that of twenty and writes about her experiences during that period.

Jane, as a little girl, lacks anything that would protect her, that is, property, kind parents and what is called girlish beauty.

This report examines Jane's self-realization and how she achieves it through her journey through her five homes, that is, Gateshead, Lowood, Thornfield, Moor House and Ferndean.

At Gateshead, Jane is maltreated by the Reeds because she is a dependent. Even Abbot, a servant, has not compassion for her loneliness, for Jane is not a pretty child. Her reason cries, 'Unjust!—unjust!'

At Lowood Institution, which is a charity-school, though the supply of food is scanty and clothing is insufficient to protect children from severe cold, Jane toils hard; she rises to be the first girl in the first class; then she is invested with the office of teacher. She would not exchange Lowood with all its privations for Gateshead and its daily luxuries.

Jane's third home is Thornfield where she, as a governess, meets her master, Edward Rochester. Although he belongs to the gentry, he comes to love Jane as his equal and she responds. In spite of this, an impediment to their marriage is revealed: Rochester has a prior wife hidden away.

At Moor House, where the Rivers live, Jane was found in the doorway, faint with hunger and fatigue. Jane stayed for ten months as a teacher of a village school, while she is found to be the heiress to the property of John Eyre, her only uncle, who has just died, and also to be cousin to St. John Rivers and his sisters.

She leaves for the fifth home, Ferndean, where she finds that Bertha, Rochester's wife, died throwing herself from the roof onto the pavement.

She has become independent and has relatives and money. More than that, she married Rochester who is her life as well as she is his. In this way, she has fulfilled herself.

Key word: Self-realization

京都大学医療技術短期大学部一般教育（京都市左京区聖護院川原町53）
Division of General Education, College of Medical Technology, Kyoto University
1993年7月31日受付

ひとりの親のない少女が29歳になった。結婚して10年になる。もっとも愛する人のために生き，その人とともに暮らしてきた。彼女は10歳からおよそ10年間の生活の出来事を記録した。これが『ジェーン・エア』（1847）であり，その少女が主人公のジェーンである。その10年間とは，彼女を庇護してくれるはずのもの――財産，親，美貌――を持ち合わせなかった少女ジェーンが自立と結婚に至るまでの半生であり，ジェーンは今その回想録の筆を擱いたところである。

『ジェーン・エア』において，終始ジェーンは「私」という一人称で語り，時々，「読者よ」と呼びかける。その結果，読者はジェーンの自己実現への旅路を眼前にまざまざと展開することになり，自分もまたその道程を歩んでいるような気持ちにさせられる。

ジェーンにとって自己実現とは何であるか，また，どのようにして到達し得たのか，ということをこれから考えてゆく。が，その前に，作者シャーロット・ブロンテ（1816～1855）がこの作品を書いていた時には，18世紀後半から19世紀初めにかけてのゴシック小説の流行の余韻がまだあり，『ジェーン・エア』が人気を博したのは，ひとつにはそのゴシック的雰囲気によるということを言っておきたい。

しかし，18世紀末から19世紀初めにおけるフランス革命やナポレオンの勝利と敗北によって英国人は目覚め始め，国内においても産業革命や選挙法改正などが人々を揺り動かした。シャーロットもまたこのような外界の動きに大いに関心を持っていたにちがいない。そのことは彼女が『シャーリー』（1849）の中で，1810年にヨークシャーで起きたラダイトの反乱を模した出来事を扱っていることからも分かる。

しかし，彼女は外なる世界に目を向けると同時に，自分の内部を執拗なまでに確かめ，探索しようとした。詩や小説としてそれは結実した。シャーロットは，桂冠詩人であったロバート・サウジー（1774～1843）に数編の詩を送り，文学への志を申し述べ，批評を乞うた。その返事（1837年３月）において，彼は「女性は文学を仕事にすることは不可能である。また，そうすべきではない」と書いて憚ることがなかった。女性の作家やジャーナリストがいなかったのでは決してないが，『ジェーン・エア』の作者シャーロット・ブロンテが生きていたのは，そのような状況においてであった。

文学界の厚い壁が立ちはだかっていることを悟ってはいたが，シャーロットをはじめ，その妹たち，エミリもアンも，その短い生涯に詩や小説を書き残した。彼女たちは作品を通して自己実現を果たそうとした。

しかし，それは決して容易なことではなかった。まず，筆者が女性であることが判然としない方がよいと彼女たちは考えた。三人の詩を一冊の詩集として自費出版した時（1846），彼女たちはそれぞれの頭文字を冠した，男性とみなされそうなカラー，エリス，アクトン・ベルの筆名を用いた。

作品を書くとしても，作品中の女性，特に女主人公は，社会に公認された女性像であること，すなわち，男性読者の哀れを誘い，優越感を抱かせるように描かれることが望まれる風潮があった。それゆえ，作者が女主人公を通して自己実現を果たそうとすることは容易ではなく，作者の投影である女主人公の人生もまた，苦難に満ちたものにならざるを得なかった。

少女ジェーン・エアが，財産，親，美貌を持たないという不利が，彼女の自己実現の旅とどのようにかかわるかに論点を絞って，その旅の跡をたどってみる。

旅の宿りの場は，1　ゲーツヘッドのリード家，2　ローウッド・スクール，3　ソーンフィールドの館，4　ムーアハウス，そして終着地の　5　ファーンディーンの家である。

ゲーツヘッドのリード家にジェーンは引き取られている。父エア氏は牧師で，貧しい家の出であった。母は富裕なリード家の娘であったが，家柄が釣り合わないため，エア氏との結婚を許されず，駆落ち同然でリード家を出た。従って結婚持参金はない。貧民窟を訪ねてチフスに罹った父に相ついで母も世を去った。ジェーンを不憫に思った母の兄リード氏は彼女を引き取ったが，そのおじもやがて死に，相続すべき財産のないジェーン（後でそうでないことが分かる）はリード家で育てられて10歳になる。リード家の長男ジョン（14歳）はジェーンに「お前は乞食をするのが当然なんだ。ぼくたちみたいな紳士の子供と一緒に住んで，同じごちそうを食ったり，お母さんのお金（家督を継いだらそれはジョンのものになる：筆者注）で着物を着たりする柄じゃないんだぞ」と言う。これに対してジェーンは「不合理だわ，不公平だわ」と思い，ゴールドスミスの『ローマ史』を読んでいた（これもこの家の本棚から勝手に取り出して読んだのであろう）ので，ジョンに向かって，「あなたは奴隷の監督みたいだわ――ローマの皇帝みたいな人だわ」と思わず口に出してしまい，「その言葉に激高し，おどりかかってきたジョンに気違いのようになって抵抗し，彼をたじろがせる」のである。ジェーンの態度に，小間使いたちでさえ「若様」，「あなたの恩人のぼっちゃま」，「あなたの若いご主人様」に向かってなんということをするのかと注意する。この「あなたのご主人様」という言葉に対して，ジェーンは「ご主人様ですって。どうして私のご主人様なの。私は女中だというの」と問う。ジェーンは，ジョンと自分とが主従の関係にはないということを言おうとしたのだが，このように反問すること自体，ジェーンが主従関係という上下の関係を認めていることを表している。そして後にロチェスターとジェーンが主従関係を結ぶこととの関連を読者に想起させることとなる。

さて，「私は女中だというの」という問いに対して小間使いは，「自分の力で食べたり着たりしていないから女中以下だ」と答える。この言葉はジェーンに彼女の置かれた状況を深く悟らせる契機となり，彼女は子供心にも自立について思いを致したのであった。

次にジェーンが「貧乏」について考えるのは「赤い部屋」に入れられて失神したジェーンを診察しにやってきたロイド薬剤師との対話においてである。リード夫人は自分や子供たちの病気の際には医者を呼ぶが召使の病気にはロイド氏を呼ぶのである。ジェーンが冷遇されていることを察したロイド氏に問われて，ジェーンはできることならゲーツヘッドの屋敷から出たいと言うが，ジェーンが垣間見る外界の「貧乏」はジェーンに恐怖感をもたらす。後に顧みてジェーンは言う，「子供は勤勉な，労働する，尊敬すべき貧窮のあることを，あまり知らない。その言葉から，ただボロ着物や，けちな食物や，火の気のない暖炉や，無作法な態度や，下品な悪習を連想するだけである。貧乏は私にとっては堕落と同義語だった」と。リード家の人々の冷たい扱いに苦しむジェーンは「親切」を渇望するが，「貧乏」と「親切」が両立するとは思えない。「無教育で，ときたまゲーツヘッドの村の小屋の入り口で子供をあやしたり，洗濯をしているのを見受ける貧しい女たちのように成人するのはいやだ。身分を代償にしてまで自由をあがなおうとするほど」ジェーンは勇敢ではない。リード夫人は，エア家に貧しく卑しい親戚があるかもしれないが，乞食の仲間にちがいないと言った。「乞食なんぞしたくないわ」とジェーンは思うのである。

ロイド氏はジェーンの苦しみを思いやり，慈善学校に入れることを思いついたらしい。ジェーンに学校に行きたいかと尋ねる。学校がどんな所かについてジェーンが知っていた乏しい情報をもとに学校へ行きたいという結論をジェーンに出させたのは，ゲーツヘッドからの隔絶と新しい生活への渇望であった。

ジェーンがゲーツヘッドで除け者にされた理由として，一文なしの孤児であることのほかに，ジェーンがいわゆる「よい子」，「愛想のよい子供らしい性格」でなかったことが挙げられる。また，召使いのベッシーやアボットでさえ「あの子がかわいい，きれいな子だったら」ジェーンのよるべの

ない境遇に同情するのにと言う。ジョンの妹の「ジョージアナさんみたいに美しければ，同じ身の上でももっと気持が動くけれど」と言う。

だが，財産，愛してくれる身内，そして美貌とも無縁なジェーンはリード家で疎まれたが，それらと無縁であったからこそゲーツヘッドという幽閉の場から解き放たれたのであった。

ジェーンの旅の第二の宿りの場，ローウッド・スクールは親のない少女を教育する学院であり，そこではジェーンだけが一文なしの孤児という汚名を受けることはない。

リード夫人の知己で学院の経営者，牧師ブロックルハーストによって少女たちは衣食住の全てにわたって極度の節約を強いられている。また，ジェーンは学院の全生徒と教師の前で「恩知らず」，「うそつき」，そして「悪魔の使い」の烙印を押されるが，やがてその汚名はそそがれ，以後ジェーンは勉強を重ね，努力の成果は上り，進むべき道を切り開いてゆく。「単調ではあったが不幸ではなく，無為には送らなかった」ローウッドの８年間の生活――６年間は生徒として，２年間は教師として――が彼女の次のステップへのゆるぎない基盤となる。財産と愛してくれる身内の欠如，リード家では悪評であった「人の目をひかない顔だち」もローウッドでは彼女の立場を不利にすることはない。頼り得るものが自分だけの一文無しの孤児は自分の内に着々と財産を蓄えていった。甘やかされて育ち，家督を継いだジョンが身を滅ぼしたのとは対照的に。

そしてジェーンは自ら報知紙に広告を出し，家庭教師としての職を得た。第三の宿りの場，ソーンフィールドの館はにぎやかな工場町ミルコートの近郊にある。ロンドンへはローウッドからよりも70マイルほど近くなる。年給は30ポンド（ローウッドでは15ポンド）だ。活気と変化を求めるジェーンの胸はふくらむ。

その上，ローウッドを去る直前に訪ねてきたベッシーの話から，身内が全くないと思っていた自分に父方のおじがいることをジェーンは知る。リード夫人が言った乞食の仲間ではなく，マディラでぶどう酒商をしているらしい。だが，ジェーンが出立直前に得たこの情報はそれ以上の発展をみないまま，舞台は第三の場に移る。

底冷えのする10月のある夜，ジェーンはソーンフィールドの館に着いた。主人は不在で，家政を取りしきっているのは初老のフェアファックス夫人である。ジェーンが家庭教師となる娘アデェルは，主人が後見人になっているが血のつながる身寄りはない。10歳ほどの年かっこうなので，ジェーンは自分の幼き日の面影を重ねて哀れを感ずる。最初の数か月間はジェーンが求めていた変化と活気はなく，むしろ単調な暗さに毎日が彩られたが，主人ロチェスターの帰還によって館にもジェーンの心にも活気と変化が生じた。

ジェーンはロチェスターの外見から受けた印象を「角ばっている」と表現し，彼をぶっきらぼうで風変わりだと評している。世間並みからはずれた態度でジェーンに接するが，ジェーンもまた世間並みではないという点ではひけを取らない。このようなふたりの対話は，ふたりが率直であるので同意に至るというよりはむしろ討論の形態を取ることが多い。雇われている家庭教師と彼女に30ポンドを支給し，広大な領地を所有し紳士階級に属する主人とが，娘とその父親ほども年齢の差があるふたりが，意見に相違はあっても対等に人生について論じ合うということは，以前の小説中では例をみないものであったと推測される。富と階級を越えた真心のつきあいの可能性を作者シャーロット・ブロンテはこのふたりの人物に具現化している。

美貌について考えてみる。一般に女性の容姿の美は持参金，高い家柄とともにその女性を妻にする男性の大きな誇りであった。だが，ロチェスターもジェーンも決していわゆる美男美女ではない。ま

た，互いにそれを認めている。ロチェスターが「私は美男子だと思いますか」と尋ねた時，ジェーンはお座なりの，丁寧だが曖昧な言葉でこれに答えるのではなく，つい正直に「いいえ」と言ってしまう。そしてあわてて美に対する「人の好みはまちまちだ」とか「美は大して重要でない」とかつけ加えたが，これらのジェーンの言葉もまた，従来の美についての考えをくつがえすものである。ジェーンは「大抵の人は彼を醜男だと思うだろう」が，彼には「単なる肉体的魅力の欠陥を償うに足るだけの」ものがあると評価している。ロチェスターもまた，「私が美男子でないように，あなたも美しくない」というが，彼にとって美貌はそれほど重要ではないのである。では，ジェーンは彼女自身をどのように評価しているのであろうか。「私はやはり生まれつき，小ぎれいにしたがるたちであった。外見に無頓着であったり，自分の与える印象に不注意だったりするのは私の習慣ではなかった」と言っている。もちろん彼女は美しくない自分の容貌を悲しみ，人並みに背の高い伸び伸びとした姿に憧れる。だが「丁寧に髪をとかし，質素な黒い上着でもぴっちり体に合っていて，清潔な白いレースの襟を整えたら」自分がかなり体裁よく見えることを知っている。ジェーンはソーンフィールドに着いた翌朝，初めて会う生徒アデェルも自分を不快には思わないだろうと確信して自分の部屋を出る。見る人が見れば自分は快感を与えないまでも正しい評価を受けるだけのものを与えることができると確信している。それはまた，ローウッドを去る前に会いに来たベッシーがジェーンを見て言ったことでもあった。

ロチェスターはまた家を空けて近在の社交界の集まりに出かけ，おそらく何週間も帰ってこないとフェアファックス夫人から聞いたジェーンの心は波立った。夫人によればロチェスターは家柄も器量もよい娘たちに大いに気に入られているということである。中でも男爵令嬢のブランシュ・イングラム嬢は「なだらかな肩に美しい胸の背の高い方」だということである。ジェーンは得意の絵筆で夫人から聞いたイングラム嬢の顔を上質の厚紙に綿密に描き上げ，それを「芸能に秀でた名門の貴婦人」と名づけ，一方自分の肖像画をどんな目ざわりな欠点も隠すことなくクレヨンで描いて「身よりのない，貧しい不器量な一家庭教師の肖像」と呼ぶことによってふたりの相違を強く心に刻みつけようとした。

富と家柄と美貌について社会が定めた価値観を信じてはいないが，そのような社会が彼女の前に立ちはだかる時に自分の感情――ロチェスターへの愛――を克服して事態に対処できるようにしたいと思ったのであった。

そして実際にそのような時がやってきた。ある夕刻，ロチェスターは13人の紳士淑女を引き連れて館に帰ってきた。客は数週間滞在する予定である。次の夜ロチェスターはジェーンに客たちの居るところへ来るようにと命じた。ジェーンは拒むことができない。なぜなら主人の命令には従わざるを得ないし，またしり込みをして姿を見せないならば，引け目を感じているからだと思われるであろう。その上，ジェーンには自分の目でイングラム嬢を評価したい気持があり，ロチェスターとイングラム嬢が同席しているところを見れば，ロチェスターのイングラム嬢への気持ちが分かると思ったのである。

ジェーンの目に映ったイングラム嬢はジェーンが細密画で描いた通りの「誇らしげな優美な姿」で「得意の絶頂にあるようで」あった。昼間の遊山から帰った一行が，晩餐の後は応接間に移り，談話や余興に時を過ごすのを垣間見ながら，ジェーンはイングラム嬢が美しい容姿を持ち芸能に秀でてはいるが，精神は貧しく心は生まれつき干からびていて，善良でもなければ独創的でもないことを確信するに至った。ジェーンには容姿の美の価値が心の美のそれに勝るものとはどうしても思われなかった。イングラム嬢は嫉妬するに価しない女であった。

ロチェスターがイングラム嬢をどのように見ているかが，ジェーンにとって次に重要な問題であ

る。彼がイングラム嬢に注ぐ目は冷たい，彼女に注ぐ感情には情熱が欠けている，その愛をイングラム嬢に与えていない，ジェーンに見せたことのあるおのずと出てくる自然な表情がない，とジェーンは確信することができた。にもかかわらず，イングラム嬢の身分や親類関係が彼にふさわしいからという理由で，彼がイングラム嬢と結婚しようとしているように思われ，また，それが彼の意思だと知らされることさえあった。ジェーンは妻を選ぶのにロチェスターがそのような平凡な動機に左右されるとは思いたくなかったが，結局，彼らの階級は全て結婚についてこのような主義を奉じる理由があるのだろうと自分を納得させざるを得なかった。

ジェーンがロチェスターへの愛を断念せねばならない（そうなれば職も失うことになる）かと思われたちょうどその時，少女の頃のジェーンが縁を切りたいと強く望んだリード家との関係がふたたび生ずる。重病のリード夫人がうわごとにジェーンの名を呼んだので，リード家から迎えの馬車が寄越されたのである。ゲーツヘッドに戻ったジェーンは夫人の床の傍らで自分がエア家の唯一の相続人であることを知らされる（このことについては以前ジェーンがローウッドを去る直前にベッシーから幾分か聞いていた）。父方のおじジョン・エアがジェーンを養女とし，自分の死後はジェーンを遺産相続人にしたいという手紙を7年前（ジェーンはこの時すでにローウッドへ移っていた）に送っており，死期が近づいたリード夫人はジェーンへの憎しみから放置しておいた手紙を今ジェーンに見せるのである。7年前の手紙が述べていることとはいえ，ジェーンは愛してくれる身内と経済的な保障を与えられる見込みを得たのである。

リード夫人が亡くなる。ジェーンの不在中のことについてはフェアファックス夫人から便りがあった。客たちは帰り，ロチェスターもロンドンに出かけているが，やがて戻ってくるはずである，出がけに新しい馬車を買い入れると話していたから，彼は婚礼の支度を整えに行ったのであろう，というのがその文面である。ジェーンはソーンフィールドへ戻る。ロチェスターへの愛の気持ちは募るが，心は重く辛い。

ジェーンが戻ってからもいっこうに結婚の準備が進んでいるようには見えないが，ジェーンがそれについてロチェスターに問うことはできない。ロチェスターはイングラム嬢と結婚するつもりであると見えるような素振りを時折ジェーンに示してきた。にもかかわらず，それについてのジェーンの疑念を晴らさぬままに，ジェーンに結婚を申し込む。彼はジェーンの怒りと拒絶に会う。そしてロチェスターはイングラム嬢と結婚する意思は全くないと，ジェーンに明言する。

ロチェスターにおいても，結婚の意味は家柄の釣り合いや財産の保持よりも，愛，言いかえれば，魂と魂との結びつきにあった。ではなぜ，ロチェスターはイングラム嬢と結婚するかのような素振りをジェーンに見せたのかという疑問はまだ消えないが，ジェーンは彼の真剣な表情にその言葉の真実を読みとり，ついに結婚の申し出を受け入れた。

ジェーンの身を真心から案じたフェアファックス夫人は「あのようなご身分の殿方が家庭教師と結婚するなんて，例のないことですからね」と懸念する。今はもうロチェスターの愛を確信できるジェーンは階級を愛に優先させるこのような考え方を一蹴する。しかし，ロチェスターが貴族趣味から平民の花嫁を宝石で飾り立てたがることに当惑と屈辱を感じたジェーンは，おじジョン・エアがリード夫人に宛てた手紙のことを思い出し，「ささやかな，独立できる財産があったら，それは私の救いになるだろう」と思う。ジェーンはジョン・エアにロチェスターとの結婚のことを書き送った。この手紙が皮肉にも，しかし幸いなことに，ジェーンとロチェスターの契りを阻む原因となる。

ロチェスターとジェーンが教会で結婚式の誓いを交わす直前，リチャード・メースンに伴われた弁護士ブリッグズによって，ロチェスターには妻がいることが知らされる。結局，ロチェスターもこれを認める。15年前にロチェスターは，その美貌のためにスパニッシュタウンの誇りとなっていた，

ジャマイカの農園主メースンの娘バーサと結婚した。3万ポンドの持参金つきのバーサは母親の精神病の血を受けており，やがてその兆候があらわれた。ロチェスターは妻を館の奥深くの一室に幽閉した。ジョン・エアはバーサの兄リチャード・メースンと取り引きの上での知己であったので，ジェーンが送った手紙についてメースンに話したところ，重婚の事実が分かったのである。

実は領地の分割を嫌ったロチェスターの父が次男のエドワード・ロチェスターに土地を与える代りに持参金つきのバーサを娶らせたのであり，彼もまた不幸な結婚の犠牲者であった。しかし，ジェーンは彼の陥った不幸に深く同情したけれども，また，ロチェスターへの愛は限りなく大きかったけれども，法律にも道徳にもそむく重婚に甘んじ，愛人の地位にとどまることはできなかった。ジェーンはロチェスターに心を残して，しかし，決然とソーンフィールドを去った。どこへ行くというあてもない。しかし，第四の宿りの場を求めなければならなかった。

持ち合わせたわずかのお金をも使い果たして三日間野宿をした。「乞食なんぞしたくないわ」とかつて思ったジェーンが物乞いさえして生命をつないだ。戸口で倒れていたのをその家の主人に助け入れられ，徐々に回復した。この家の人々，牧師セント・ジョン・リヴァーズ，家庭教師をして生計を立てている妹のメアリとダイアナは，意識が戻りかけたジェーンの容貌について，「一種独特の顔」，「丈夫になって元気が出てきたら感じのよい顔」，「思慮のある人のようだが，すこしも美人でない」顔だと評している。セント・ジョンは村の女の子たちを教える仕事をジェーンに与えた。年給は30ポンドであるが，ジェーンは自立の手だてを得ることができた。

おじのジョン・エアの死がやがて伝えられた。遺産2万ポンドをジェーンは受け継ぐことになる。そしてジョン・エアはリヴァーズ兄妹にとっても母方のおじに当り，だが，ある事情から彼らには遺産が与えられなかったことが判明する。

このように，ジェーンの失われた財産と縁（えにし）は今，回復した。容姿の美については，美人でないといわれても，感じのいい顔だちといわれても，ジェーンはもはや頓着しない。

神の使命を地上で果たすべくインドへ布教に向かうセント・ジョンは，彼の助力者としてジェーンを定め，ジェーンに結婚を要求した。結婚を温かい人間的な愛の結実，魂と魂の語りかけであると考えるジェーンはこの要求を受け入れることができない。彼から受ける畏怖の力がジェーンの意志を圧倒しそうになるのに，ジェーンは辛うじて耐えた。翌日彼女はムーアハウスを去って，第五の宿りの場，そして彼女の旅の終着地へ向かった。

ジェーンはソーンフィールドの館にやって来た。館は焼け落ちていた。近くの宿屋の主人から，館の火事の最中，バーサが屋根に上がり身を投げたこと，ロチェスターはバーサを助け出そうとして自分も屋根に上り，焼死は免れたものの，片手と視力を失ったことを知る。「ではさっそく馬車を仕立てて下さい。お宅の若い衆が暗くならないうちにファーンディーンに着くように走らせて下さるなら，あなたにも若い衆にも，普通の倍額の料金をさしあげます」と宿屋の主人に言うジェーンは，もう貧乏ではない。

ふたりは再会した。前と同じようにひっそりと，しかし中断されることが決してない結婚式をふたりは挙げた。屋敷へ戻ったジェーンは，料理人のジョンから受けたお祝いの言葉のお返しに，5ポンド紙幣——家庭教師の年給の約6分の1——を手渡す。ジェーン・エアは今ロチェスター夫人となった。

孤児としてリード家に寄食していた10歳の頃からロチェスターと永遠に結ばれるまでの間の，貧

乏，名もない身分，不器量についてのジェーンの認識と対処の変化について考えてみた。貧乏，名もない身分，不器量を社会は排斥した。しかしジェーンは「ありのまま」の自分を愛し，自分を高めようとたゆまぬ努力をし，正しいことのみに従うことによってこれらを克服していった。そしてついにロチェスターと結ばれたのであるから，それはジェーンの自己修練の当然の報いとみなしてもよいであろう。

だが，バーサの死という問題が残っている。はじめに述べたように，この作品が書かれた当時，ゴシック小説風靡の余韻があった。幽閉された狂気の妻バーサを作品に登場させた作者は，読者層が寄せるゴシック小説への強い関心を意識していたと思われる。

一方，18世紀末から19世紀にかけて精神障害に対する考えが変わるとともに，精神障害者の処遇についても調査と改革が進められた。その結果として，癲狂院法・州立保護院法（1828）や精神病者収容法（1845）などが制定されたが，シャーロット・ブロンテもこれらの動向に，とりわけ，女性の心の病の原因とその扱いに関心を抱いていた。そのことは彼女がマンチェスターに近いノース・リーズのエア家の「狂女の部屋」を1845年に訪問していることからも分かる。

バーサが死ぬことがなければ，ジェーンがロチェスター夫人の地位を得ることはできなかったはずである。読者は小説全体のゴシック的な雰囲気に魅せられ，また，ジェーンの自己実現の達成を喜び安堵する余り，バーサの存在を軽視してはならない。バーサの幽閉をジェーンの心の抑圧の象徴とみなすこともできると思われる。稿を改め，バーサをクローズ・アップすることによってバーサとジェーンの関係について考えてみたいと思っている。

文　　献

テキストには次の２冊を用いた。

1）Charlotte Brontë: Jane Eyre.　The World's Classics.　Oxford, New York: Oxford University Press, 1975: 1-473
2）C・ブロンテ：ジェーン・エア，上・下（大久保康雄訳），東京：新潮社，1953：1-428（上），1-428（下）